生活文化創造都市推進事業

# 生活文化創造都市フォーラム
# 「八戸地域会議」

実施報告書

２０２５年　３月

一般財団法人 日本ファッション協会

# はじめに

一般財団法人日本ファッション協会では、地域振興事業として、平成 15（2003）年度から「生活文化創造都市推進事業」に取り組んでいます。

これは、欧米から始まり、今や世界で 350 以上の都市が目指している都市モデル「創造都市=Creative City」をベースに、地域独自の文化に根差した市民の活発な創造活動こそが豊かな生活文化を育み、産業の振興にもつながるとの認識のもと推進している事業です。

今年度は、まちづくりシンポジウム「生活文化創造都市フォーラム」を青森県八戸市および八戸商工会議所との共催で、令和 7 年 1 月 23 日に、八戸ポータルミュージアム「はっち」で開催いたしました。この報告書はその内容をまとめたものです。

皆さまには、ぜひご高覧いただき、これからのまちづくりのご参考にしていただければ幸いです。

令和 7 年 3 月

一般財団法人 日本ファッション協会

# 目　　次

**はじめに** ..... 2

**目次** ..... 4

**開催概要** ..... 6

**主催者代表挨拶**
山下　健　　一般財団法人 日本ファッション協会 専務理事 ..... 8

**ホストシティ代表挨拶**
佐々木　郁夫氏　八戸市副市長 ..... 9

**基調講演**
「世界の創造都市と八戸市の可能性」
佐々木　雅幸氏　　創造都市ネットワーク日本 顧問
大阪市立大学名誉教授 ..... 11

**パネルディスカッション**
「『本のまち八戸』の推進」 ..... 20

## 【開　催　概　要】

**タイトル**：生活文化創造都市推進事業
生活文化創造都市フォーラム「八戸地域会議」
**開催日時**：令和 7 年 1 月 23 日（木）14：00～16：30
**会　　場**：八戸ポータルミュージアム「はっち」1F はっちひろば
**主　　催**：一般財団法人 日本ファッション協会
**共　　催**：八戸市、八戸商工会議所
**後　　援**：日本商工会議所
**テ ー マ**：「本のまち八戸」の推進
**参 加 費**：無料
**参加人数**：約 100 名

## 【プログラム】

**主催者代表挨拶**
一般財団法人 日本ファッション協会 専務理事　　山　下　健

**ホストシティ代表挨拶**
八戸市副市長　　佐々木　郁夫氏

**基調講演**　「世界の創造都市と八戸市の可能性」
創造都市ネットワーク日本 顧問
大阪市立大学名誉教授
佐々木　雅 幸 氏

**パネルディスカッション**
「『本のまち八戸』の推進」

**◆コーディネーター**
横浜市立大学大学院 都市社会文化研究科 客員教授
野 田　邦 弘 氏

**◆パネリスト**　（五十音順）
公益財団法人 吉備路文学館 館長
文学創造都市おかやま推進会議委員　　明 石　英 嗣 氏
鳥取県立図書館 資料課 課長　　岩 崎　武 史 氏
八戸ブックセンター 所長　　音喜多　信 嗣 氏

# 主催者代表挨拶

一般財団法人 日本ファッション協会
専務理事 山 下　健

皆さまこんにちは。日本ファッション協会の山下でございます。

本日は、生活文化創造都市フォーラム「八戸地域会議」に、年始のお忙しい中多くの皆さまにお集りいただきました。誠にありがとうございます。また公務ご多忙のところ、八戸副市長の佐々木郁夫様にもご臨席賜りました。重ねて感謝申し上げます。

私ども、日本ファッション協会は、日本商工会議所第 14 代会頭の五島昇氏発意のもと、1990 年に設立されました。一般に“ファッション”という言葉は、洋服など“衣類”に関わることと捉えられがちですが、私どもでは衣・食・住・サービスを含む、生活文化にかかわる全ての産業を「ファッション系産業」と位置づけまして、その振興と「豊かな生活文化の創造」に取り組んでおり、本日のこの地域会議も協会活動の柱の一つとなっております。

さて、今回の地域会議のタイトルに「本のまち八戸の推進」とございます。書店、いわゆる街の本屋さんは文化の発信拠点であり、多様な考え方を維持し、国力にも影響を与えうる、きわめて重要な社会の資産です。

しかしながらその書店の数ですが、この 20 年間で２万店余りから１万店余りへと半減し、書店数ゼロの自治体が 4 分の１を超えるという大変憂慮すべき状況になっておりますことは皆さまご高承のとおりかと存じます。

経済産業省でも、書店の減少がそのまま文化の衰退につながっていくのではないか との危機感から、「書店振興プロジェクトチーム」を立ち上げ、広く国民の声を集めるなど、書店振興に向けて動き出しています。

本日のこの会議には、創造都市論において日本を代表する佐々木先生と野田先生にお越しいただきました。またシンポジウムでは、「本のまち」として文化の香り高いまちづくりを目指し様々な事業に取り組んでいらっしゃるここ八戸市から、八戸ブックセンター所長の音喜多様に加えまして、2023 年「文学分野」でユネスコ創造都市ネットワークに加盟認定され、多角的なアプローチで地域文化の活性化に取り組んでいらっしゃる岡山市から吉備路文学館館長の明石様、また「鳥取方式」とも呼ばれ、書店と図書館が連携した先進的な取り組みを展開されている、鳥取県立図書館から岩崎様の御二方をお招きしております。

「文学」や「本」を基軸としたまちづくりの先頭を走るこの３つの地域が一堂に会しまして、「本とまちづくり」について議論をすることは、まさに時宜を得たものであろうかと存じます。今回のシンポジウムが八戸市、岡山市、鳥取県の今後の事業のご発展に、いささかなりとも貢献できれば幸いでございます。

最後になりますが、この「八戸地域会議」の開催にあたりましては、八戸市役所の皆さま、また八戸商工会議所の皆さまに多大なるご尽力を賜りましたこと、心から御礼を申し上げまして、簡単でございますが、冒頭の挨拶とさせていただきます。

本日はどうぞよろしくお願い申し上げます。ありがとうございました。

# ホストシティ代表挨拶

八戸市副市長
佐々木 郁夫様

皆様こんにちは、ただいまご紹介をいただきました副市長を務めております佐々木でございます。本日、熊谷市長が別の公務で上京中でございますので、大変恐縮ではございますが、私が代わりまして歓迎のご挨拶をさせていただきます。

まずもって、本日は、一般財団法人日本ファッション協会並びに八戸市、八戸商工会議所の共催によりまして、当市におきまして、まちづくりシンポジウム「生活文化創造都市フォーラム八戸地域会議」が開催されますことを心よりお喜び申し上げます。そしてまた日本ファッション協会の皆様、そして関係の皆様にはようこそ八戸市にお越しいただきました。皆様のご来訪を、市民を代表し心より歓迎申し上げます。

さて、この冬の青森県でございますが、大変な豪雪に見舞われております。全国ニュースにも度々登場しているわけでございますが、そのような中、ここ八戸においでになった皆様には全く雪のない八戸ということで多少びっくりされている方もいらっしゃるかもわかりません。八戸は青森県内で元々雪が非常に少ない地域でございます。

今日現在、積雪は 0 センチというふうに聞いてございます。まさにこのように非常に多様性に富んだ地域、それが青森県でございます。東は太平洋、西は日本海、そして北は津軽海峡と、こういう大きな海に三方を囲まれたそういった土地柄でございまして、各地域それぞれ、やはり風土、歴史、そしてまた気候、方言あるいは食文化、そしてまた祭りなど大変特徴のあるそういった地域となっているのが、私ども青森県でございます。

そういった中でここ八戸市でございますが、太平洋側の南部に位置いたしております。先ほど申し上げた通り、雪は県内の中では少ない地域でございます。むしろ氷の都「氷都八戸」を標榜し、スケートが歴史的にも大変盛んな地域でございますし、また工業あるいは水産業が盛んな産業都市でもございます。

そういった私ども八戸でございますが、文化面におきましては、「文化芸術を通して市民が生き生きと心豊かに暮らせるまち、文化芸術の力を活用した魅力あふれるまち八戸の実現」を基本理念に掲げました「はちのへ文化のまちづくりプラン」を策定し、計画的に推進しているところでございます。

中でも本に触れる取り組みといたしましては、小学生に市内の書店で使用できるクーポンを配

付し、自ら本を選び、購入する体験を通しまして、読書に親しむ環境を作ることを目的としたマイブック推進事業、あるいは「本を読む人を増やす、本を書く人を増やす、本でまちを盛り上げる」を基本方針とした八戸ブックセンターを平成 28 年に開設し、子どもから大人まで幅広い世代の市民が本に親しむことができますよう、様々な事業を実施しております。昨年は 9 月に「本のまち八戸ブックフェス」の開催、11 月には地元新聞社との共催によります「知的書評合戦ビブリオバトル in 八戸」を開催し、それぞれ多くの方にご来場をいただいたところでございます。

また、来月には八戸市読書団体連合会と市が協力いたしまして、ジャーナリストの池上彰さんのトークイベントや、八戸市立図書館開館 150 周年記念のパネル展を開催する予定といたしております。市といたしましては、各種取り組みを展開し、まちの活性化並びに市民の福祉の向上に繋げてまいりたいと考えております。皆様には引き続きのお力添えを賜りますようよろしくお願い申し上げます。

結びに、本日のフォーラム開催にご尽力いただきました関係者の皆様に深く敬意を表しますとともに、ご来場の皆様にとりまして、有意義な時間となりますことを心よりご祈念申し上げまして挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

# 基　調　講　演

**佐々木　雅幸氏**
（ささき　まさゆき）

**創造都市ネットワーク日本　顧問、**
**大阪市立大学名誉教授**

1980 年より大阪経済法科大学、金沢大学、立命館大学、大阪市立大学、同志社大学で教授を勤め、現在は同志社大学嘱託研究員、大阪市立大学名誉教授、大阪公立大学都市科学・防災研究センター客員教授。
創造都市研究の日本とアジアにおける第一人者。創造都市ネットワーク日本の顧問として、ユネスコや全国各地の創造都市の取組みを支援。日本都市学会賞、金沢市文化賞受賞。
主な著書に『創造都市の経済学』『創造都市への挑戦：産業と文化の息づく街へ』など。

# 「世界の創造都市と八戸市の可能性」

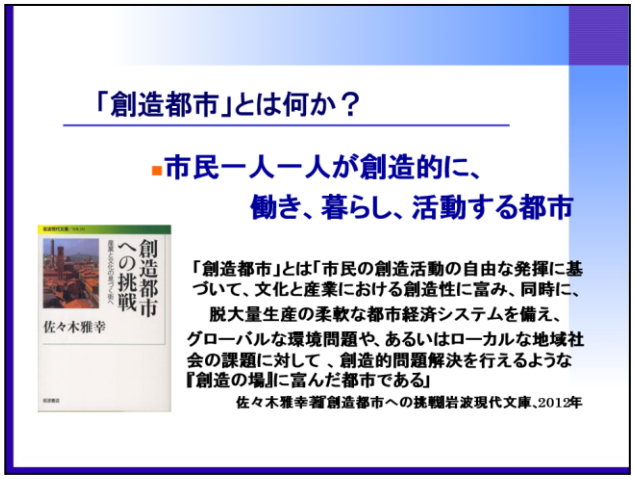
皆さんこんにちは、佐々木雅幸です。こちらは、佐々木姓の方が多いので、とてもアットホームに感じております。

今日は 30 分ほどパワーポイントを使ってお話させていただきます。

私は会場の「はっち」がオープンしました 2011 年 2 月 11 日、その前後に 2 回こちらに伺っておりまして、オープニングの記念シンポジウムがここで開催され、今日と全く同じ場所でお話した記憶が、今蘇ってまいりました。

そのときにえんぶりなど、伝統の祭がとてもおもしろいと感じました。それから食べるものの量が多くて美味しいので、朝も昼ももうお腹いっぱいで、ほっとくと寝ちゃうみたいな、そんな感じになっていますが、頑張って話をさせていただきます。

今日のテーマは、私が 20 年ちょっと前ぐらいから提唱しておりまして、そして世界のユネスコが、それを採用したネットワークがあります。「クリエイティブシティズネットワーク」という、ユネスコが 2004 年に始めたネットワークです。現在のところ日本では 11 の都市が加盟しておりまして、最新では岡山市が文学というジャンルで創造都市の認定を受けており、私はその 2 年ほど前から相談を受け、申請書類を整えるなどいろいろな協力をさせていただいてきました。今日は主に世界の創造都市と、それから「文学や本のまちづくり」についてお話させていただくことにいたします。




早速ですが、私の本の紹介です。『創造都市への挑戦』という本で、現在は岩波の現代文庫という形でロングセラーになっております。そこに書いていることが、実際にいくつかの町の中でいろいろな化学反応を起こして、まちづくりに良い結果をもたらしてきました。ポイントはどういうことかと言いますと、今日お集まりになった方々も含めて、その町に住んでおられるお 1 人お 1 人が日々創造的に働き、暮らし活動するといったことができるまちのことを創造都市、クリエイティブシティと呼んでおります。

この考え方が、21 世紀の新しい都市の考え方として登場したのです。ちょうどイギリス人のチャールズ・ランドリーという方が 2000 年に『The Creative City』という本を書きました。いつも言うのですけれど、この「ランドリー」と「ラウンドリー」とはスペルが異なっていて、「ラウンドリー」とは町の洗濯屋さんのことです。

ランドリーさんは国際的な活躍をしている都市プランナーです。それからアメリカ人のリチャード・フロリダさんという方がいまして、この方が『The Rise of the Creative Class』という本を書きます。この人はフロリダに住んでいるわけではなく、名前がフロリダさんで、当時はピッ

ツバーグ、米国大統領選でトランプさんが勝ちましたけれども、トランプさんの基盤というのは「フロストベルト」、衰退していく街ですね。元工業都市で衰退した街、そこで不満を持った人たちの票がトランプさんに入ったということなのです。そこの大学にいたフロリダさんが、これからの町のあり方を、クリエイティブクラス、クリエイターやアーティストが集まるまちが発展すると書いたのです。私は全く彼らと同じ時期に本を書きまして、主に中国や韓国でも私の本は翻訳をされて、アジアでは私が創造都市の第一人者という形になっております。これがちょうど 21 世紀の初頭、今から 25 年ぐらい前のことです。

それから 10 年以上経って、我が国政府もやっと創造都市ということがわかってきて、Society5.0 という提唱をするようになります。経団連もこの Society 5.0 ということを言うようになりまして、今の社会というのは第一段階が狩猟社会で、農耕社会、工業社会、情報社会となって、21 世紀の現在を創造社会と呼んでいます。この社会では、いわゆるデジタル革新が進んで、生成 AI などがどんどん活用されてきました。

そうした中で人々に求められるのは、AI よりもっとクリエイティブに生きること、あるいは AI が考えないようなこと、その先のイマジネーションですね。クリエイティブとイマジネーションという、日本語で言うと、創造性と想像性です。これが社会に求められ人々の生活の中で大事になるということを、政府も認めるようになりました。私どもが掲げてきたことは、今の時代の中で底流を流れている大きな方向性を進めてきたということになります。

少し俯瞰してみると、20 世紀というのは一言で言ったら工業社会なのですね。21 世紀のこれから社会は創造社会に向かう大きな分水嶺があります。それは、生産、消費、流通、全ての面において、かつて大量生産・大量消費・大量流通と言われてきた時代には、圧倒的に大都市が有利なのです。しかし今や、大都市が有利だという時代が変わってきて、地方の都市、中小の都市でもクリエイティブな都市を目指すということにおいては、むしろチャンスが多い。

**工業社会から創造社会Society5.0へ**

| | 工業社会 | 創造社会 |
|---|---|---|
| 生産システム | 大規模生産<br>トップダウン | フレキシブル生産<br>ボトムアップ |
| 消費システム | 非個性的大量消費 | 個性的文化的消費 |
| 流通・メディア | 大量流通<br>マスメディア | ネットワーク<br>ソーシャルメディア |
| 優位性 | 資産・土地・エネルギー | クリエイティブ人材<br>知恵知識・文化芸術 |
| 都市の形 | 産業都市 | 創造都市 |
| ツーリズム | マスツーリズム | クリエイティブツーリズム |

それは生産も商品も流通も変化してきているからで、今、SNS が普及してきていますから、古いマスコミがどんどんどんどん劣化してきて、流通においてもそうであり、消費においても個性的文化的消費が増えてきています。ファッションにおいても、隣の人と同じような身なりをしたくないのですね。むしろ違うものを選ぶわけです。生産も変化します。車もおそらく EV が増えたら、もっとたくさんの色やデザインのものが増えてくるはずです。

物の作り方から消費、そして流通が変化してきたときに、都市や地域は何が競争力になるのでしょうか。そこに住んでいる人たちのクリエイティビティ、創造性です。そうしたものをどれだけ高められるかというところに主眼を置いたらいい。ひょっとして石破総理も私の本を読んだかもしれません。「楽しい日本」と言い出しています。あれは多分近いのです。つまり、地方創生 2.0 というのは、工場移転や工場誘致ではないのです。クリエイティブに生きる、楽しい場所に新しい移住者が増えること。そういうことに変わってくるのです。これが創造都市ということです。

チャールズ・ランドリーさんはイギリス人で、彼は私の一つ年上で友人ですが、世界中いろいろと彼と一緒に回ってシンポジウムなどを行ってきたのですけれど、彼の話で特に面白いのは、クリエイティブな場所を作るということです。「創造的な場」を作る。それはどういうことかというと、ちょうどこの「はっち」のような場所をつくるということです。皆さん、考えてみてください。2011 年にこの「はっち」が生まれるまでは、八戸の街中で、人々が寒い中、集まってきてワイワイガヤガヤ喋っているというところは多分なかったと思います。だけど街の中にそういった「creative milieu」というのですが、これが一つでも出きて増えてくると、まちは変わってくるのです。創造都市はクリエイティブな場所をたくさん作って、それを人々が楽しむということなのです。その政策を基本に据えた八戸市は、創造都市の日本における代表都市の一つです。「はっち」を作り、「はっち」の兄弟のようなブックセンターができて、さらに美術館ができましたね。

この流れというのは、まさに創造都市の流れです。イギリスでそれが大成功したのは、ちょっと古いのですが、ロンドンオリンピックを思い出してください。2012 年のロンドンオリンピックは成功したと言われています。なぜ成功したかというと、カルチュラル・オリンピアードをやったからです。カルチュラル・オリンピアードというのは、スポーツの祭典だけではなく、世界中のスポーツマンが集まる、アスリートが集まるのに合わせて、世界中のアーティストが集まってきて、イギリス全土でアートプロジェクトを展開しました。

これによってデザインのダサイ、食事のまずい英国が変わっていったのですね。それがロンドンオリンピックの成果だと言われておりまして、まさにクリエイティブロンドンという政策を続けてきた結果、生まれてきたものです。

アメリカのリチャード・フロリダさんは、とってもエッジの効いたことを言いました。創造都市を作ろうとしたらゲイやレスビアンを集めたらいいと言ったのです。今でこそ、ゲイレスビアン、LGBT は普通の言葉になってきていますが、今から 20 年、25 年前はまだまだアメリカ社会にあっても一般的な言葉ではありませんでした。

彼の説ですが、ハイテクの技術者が集まるところというのは、ゲイやレスビアンが多いという社会調査の結果があるのです。それを学者ふうに読み解くと、ゲイやレスビアンの人たちのように、伝統的な生活や価値観からかけ離れて、多様な生き方を進める社会が、先端的なハイテク研究者が住みやすいということです。彼らは日常生活の中でも、今起こっていることをはるかに超えた非日常のことを考えています。多様性に富んだ人たちと一緒に住んで楽しい、だから同性愛者でも楽しく住めるようなそういう多様性に満ちた都市を作ると、ハイテクの人たちも集まってくると言ったのです。

その代表都市はどこかというと、サンフランシスコです。サンフランシスコには私もしばしば行きますが、アメリカの中で一番早く、同性同士の結婚を認めました。そして LGBT の割合が高い都市で、そのサンフランシスコから南に下りていったところにあるのがシリコンバレーなのです。シリコンバレーとサンフランシスコの間に、今をときめく GAFA の本社がある。つまり、アメリカは全体がハイテク社会になっているのでなくて、要はシリコンバレー一帯が今のアメリカのデジタル革命を起こしている。それはどういうことかというと、ゲイレスビアンが多いからそうなったというのが彼の説で、それくらいのインパクトがあることを言いました。

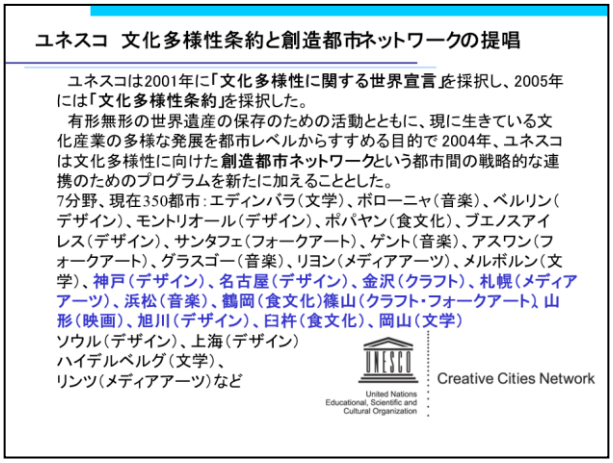
実際にシリコンバレーにあるスタンフォード大学から様々なハイテクベンチャーがスピンオフしていきました。スピンオフ、スピンアウトという流れも、創造都市という中にこの芽があった

ということになります。

創造都市というのはどういう産業をベースにしているかというと、いわゆるマルチメディア、映像、映画、音楽、劇場などのクリエイティブ産業が製造業に代わって雇用をもたらして成長していくことになります。今、経産省もまたクリエイティブ産業に力点を置こうとしています。そういう中でいくと、本や出版産業は、単体で考えるよりむしろクリエイティブ産業として位置づけし直すという方が私はいいと思っています。そうした芸術文化のもつ創造性が、都市の住民に新しい問題解決をもたらし、文化的伝統をグローバル化の中でさらに魅力的なものにしていきます。

つまりえんぶりなどの伝統文化を新しいデジタル的革命の中で、次の世代に引き継いで発展させていくことになります。となると、伝統文化をしっかりと残している都市こそ創造都市としての多様性に富んでいるということになってくるわけです。デジタル化の中で伝統文化がさらに発展していくということになります。

そういった形で都市が元気になっていく。特に中小の都市が元気になっていって、むしろ大都市の発展を抑制していかないと、地球環境の将来はないのです。何しろ地球環境に負荷をかけているのは大都市における過剰生産と過剰消費なのです。それを転換しようと思えば、中小都市がネットワーク化して創造的に発展しなければならないと私どもは考えて進めているわけです。




ユネスコすなわち、国際連合教育科学文化機関がありますが、日本のマスコミ的にはユネスコというのは世界遺産とイコールになって理解されている。こちらも何か縄文遺跡が世界遺産になったというお話がありましたが、ユネスコがやっているのは世界遺産だけではありません。今から 10 年ちょっと前、2004 年から創造都市というものを進めるということもやっておりまして、その中に七つのジャンル、「クラフト&フォークアート」「ミュージック」「リタレチャー」「デザイン」「メディアアート」「フィルム」「ガストロノミー」があって、日本では「クラフト&フォークアート」に金沢と丹波篠山、「ミュージック」が浜松、「リタレチャー」に先ほど紹介しました岡山、「デザイン」が神戸、名古屋、そして北海道の旭川、「メディアアート」が札幌、「フィルム」が山形市、「ガストロノミー」が同じく山形県の鶴岡市と大分県の臼杵市と、これだけの 11 都市が今揃っていまして、私としては八戸市も頑張ったらいけるぞということを今日申し上げたいわけですね。この七つのジャンルからいけば、「リタレチャー」、文学ですね。本のまち八戸は文学が一番近いとは思います。実は今回の申請から「アーキテクチャー／建築」も入りましたので、横浜も建築で認定を受けたらどうかと思っております。

このユネスコの創造都市は、当然、国連の機関ですから SDGs と紐づいておりまして、文化芸術でSDGsに接近することをテーマにしています。2022年にメキシコシティーでMONDIACULTという、正式名称は「文化政策と持続可能な開発に関する世界会議（World Conference on Cultural Policies and Sustainable Development）」が行われました。世界中の文化担当大臣が集まって文化政策の方針を決めています。それは何かというと、市民の文化的権利をまず保障しま

しょう、文化分野でデジタル技術を活用しましょう、文化と芸術教育を促進しましょう、文化のための持続可能なエコ経済システムを作りましょう。そして気候変動に直面し、文化を保護し促進する。さらに、このコロナの中でアーティストの生活が大変だったので、危険にさらされているアーティストと文化を保護します、こういった世界的な宣言を行いました。こういう方針に合わせてユネスコの創造都市というものが、今、進もうとしております。

ユネスコの創造都市は、現在、世界に 350 あります。代表的なユネスコ創造都市、文学分野の創造都市について少しお話してみたいと思います。一つは、英国のスコットランドに、エディンバラという古い町がありまして、エディンバラ城は 11 世紀の城で、旧市街地はユネスコ世界遺産に認定をされております。

作家としては、『宝島』や『ジキル博士とハイド氏』という我々が子供の頃に読んだ本がありますよね。あれを書いたロバート・ルイス・スティーヴンソンなど、有名な作家が出てきているのです。その町で夏になると、「エディンバラ国際フェスティバル」というフェスティバルが行われ、世界中の文学関係、演劇関係の人が集まってくるという大きなフェスティバルで世界最大級のものが行われています。そこで、「エディンバラ国際ブックフェスティバル」いうものが開催されております。岡山市にもこうした「エディンバラ国際ブックフェスティバル」に匹敵するようなものができないかということをお願いしております。

それからオーストラリアにメルボルンというところがあります。ここはビクトリア州の州都で、やっぱり図書館がとってもいいのですね。その図書館の周辺にカフェがたくさん点在していて、まさにアートとカフェ文化の発祥の地と言われておりまして、多文化共生の都市です。

ビクトリア州立図書館には私も行きましたけれども、本当に立派な図書館でした。図書館の機能というのは、最近どんどんどんどん変化してきていて、有名なニューヨーク市立図書館は、仕事を探そうと思ったらまず図書館に行って探すというような機能があるわけです。後で申しますけれども、金沢にまた新しい図書ができております。こういう町に、「メルボルン・レアブックウィーク」というものがあります。レアブック、あんまり知られていない本のことですね、そういったものをお互い評価し合うというフェスティバルです。

それからスペインではバルセロナという町があります。バルセロナは私も大好きで、やっぱりここによく出かけます。何が面白いかというと、もう町並みが他のまちと違うのですね。ガウディ派といいますか、その人たちが作った建物が町中にゴロゴロしているので、いわば建築の見本市のようなことになっています。アーティストとしては、ピカソ、ダリ、ミロですね。現代アートの先駆者と言われる人たちが全部この町から出ています。

同時にそこには都市再生のバルセロナモデルというものがあって、パブリックとプライベートをうまく組み合わせている。おそらく図書館や本屋さんもそうなのだけれども、パブリックの領域とプライベートの領域を隔絶するのではなくて上手に組み合わせることができています、ちょ

うど八戸市のように。特にバルセロナの街の中で注目するのは、広場にパブリックアートが置かれていて、そこが討論の場になって、まさに「創造の場」になっているということですね。ここ「はっち」も広場なのです。建物の中のこういったところが「創造の場」になってくるのです。

バルセロナの街で、2004 年ちょうどユネスコが創造都市ネットワークを提唱したときに、世界文化フォーラムが開かれました。その「ユニバーサルフォーラム・カルチャーズ」に私も招かれまして、報告をしたのです。もちろんスペイン語ではなくて英語で。バルセロナにはスペイン語だけでなく、カタルーニャ語というのがあって、日本でいうと日本語の翻訳と大阪弁の翻訳があるような感じですね。そういったところで、都市の多様性の話をさせていただいたのですが、ここで面白かったのは、これからの社会は弱肉強食のグローバル競争ではなく、お互いに文化の多様性を認め合う、調和のとれたグローバリゼーションが大事だということをアマルティア・セン／Amartya Sen というインド人でノーベル経済学賞を受賞した方が、力強いメッセージを出しました。

私もそれは本当にその通りだと思っていまして、これからはグローバル化の中で多様性を認め合う、文化の多様性を認め合うことが、とても大事になってきます。同じような切り口で頑張っているのが、カナダのモントリオールです。今、国連が掲げている文化多様性という言葉と生物多様性という言葉がありますが、モントリオールでは「生物文化多様性」ということを提唱するようになりました。この町でとても注目をされているのは、ヌーヴォー・シルク、新しいサーカスです。先ほどロンドンオリンピックが良かったと言いましたけれど、最近のオリンピックは開会式や閉会式が面白いのです。なぜ面白いかと言ったら、普通に選手が入ってくるだけではなくて、そこでは大道芸が繰り広げられます。例えば、ロンドンオリンピックでしたらイギリスの産業革命以来、現代に至る歴史が大道芸によって舞台劇として繰り広げられました。最後に 007 が出てきて、女王陛下を連れ出したという話がありましたけれど、あれが全部、このヌーヴォー・シルクなんですよ。世界中で大道芸が流行っています。

私が留学しておりましたボローニャという町がイタリアにあります。ここには世界最古の大学があり、大学の目の前にオペラハウスがあり、それから大学生が住むための下宿屋を作るために回廊を置いて、その上に下宿屋を作ったというポルティコがあって、これが世界遺産として認定を受けています。

この町は西暦 2000 年に「欧州文化首都」を開催いたしました。そして、ここにもやっぱり図書館があります。ボローニャの図書館の特徴は、古い株式取引所として使われていたものを保存して、それをマルチメディア図書館として再生させていきました。このプロジェクトのリーダーはウンベルト・エーコという、世界の哲学者のトップにいた人ですが、もう亡くなっています。ここでもう一つ注目されるのは、「国際児童図書展」をやっていることです。ボローニャの国際児童図書展は 1964 年から開催され、世界中の出版社がこのボローニャの町で 1 週間ぐらい出展します。そして世界中のバイヤーが集まってきて、翻訳権などを取ります。そういう世界で最大の本のマーケットをボローニャがずっとやってきているということがあります。まさに本の町なのです。ユネスコにワールドブックキャピ

タル、「世界本のまち」という制度があります。毎年、本のまちを選んでいるのですが、例えば八戸も「世界本のまち」に手を挙げたら良いと思います。そのぐらいの勢いがあってもいいと思います。

街の中にあるオペラハウスでは、ヴェルディやロッシーニが活躍し、モダンジャズのグループがいて、現在の若者のために潰れたスーパーマーケットを練習場として提供するという思い切ったことをやっています。

このボローニャと提携して、日本で「絵本のまち」を目指しているのが東京都の板橋区です。板橋区は区立中央図書館の一角に板橋ボローニャ絵本館を作って、ボローニャから本を寄贈してもらって展示しています。それだけではなく、先ほどの「国際ボローニャ絵本原画展」も日本に入ってきています。日本人の絵本作家の人たちも何人か、ボローニャの賞を受賞しています。私の知っているのは、有名な文学座の俳優だった米倉斉加年さんも賞をもらっています。そのボローニャと板橋が提携するという形で絵本のまちのネットワークができています。今後、八戸市が本のまちをより進めようとしたとき、一つ目標になってくるのではないかと考えております。

それからアメリカにはサンタフェという小さな町があります。日本ではある女優さんの写真集でも話題になったサンタフェです。ここは小さな町だから、世界中からツーリストを集めようとしたときに、美術館の数とギャラリーの数で勝負しているのですね。他の町で絶対に体験できないようなクリエイティブな体験をこの町でできますよという売り込みをする。これをクリエイティブツーリズムとも言います。八戸市には「はっち」があり、ブックセンターがあり、美術館があり、他でできないクリエイティブな体験ができますよという打ち出しが、観光の分野でもできるようになると思います。

このように創造都市というものは、今世界で最も注目されている都市のあり方の一つです。日本でも創造都市ムーブメントというのは 2001 年に金沢市から始まり、横浜市に火がついて、そして日本全体に広がり、今、文化庁がネットワークを支援しています。経産省の場合も、クリエイティブ産業化を支援していくという流れになっておりまして、ご当地八戸市も創造都市ネットワーク日本に加盟いただきまして、様々にご尽力をいただいているところです。

予定の時間が残り少なくなってきたので、急いでお話します。私は金沢大学にいたときに金沢の創造都市の話を進めてきたので、この街の特徴をお話しますと、金沢では、山出 保という名市長と経済同友会のリーダーと私がタッグを組んで、毎年、創造都市会議を開催して、22 年間、引っ張ってきました。創造都市を進めようと思ったら、行政の力だけではできません。必ず商工会議所や経済同友会がタッグを組んで、そしてそこにアーティストが加わるということが不可欠です。

金沢は何といっても 2004 年に 21 世紀美術館を作りました。この美術館はそれまでの日本にあった他の美術館と全く違っていたのです。何が違うか、市長は、公園のような人々が集まるようなそういう美術館にしてほしいというので、夜遅くまで開館して、いわば保育ルームがあったり、お茶室があったり、レストランがあったり、いろいろな機能を持ってきて、見事にこれが成功をいたしました。金沢は兼六園だけでなく、21 世紀美術館を目当てに来る人が増えてきました。

八戸市も新しい美術館ができたところですから、現代美術館、これを大いに生かしてほしいと思っております。そして金沢にはつい最近、県立図書館が金沢市内の旧金沢大学工学部跡地に登場いたしました。ここのキーワードが「知的な居場所」です。今、サードプレイス、第 3 の居場

所という言葉がありますね。「会社でも家でもなく、家庭でもなくて、ちょっとほっとできるそういう場所、知的な居場所を作ってお喋りしてもいいよ、この図書館では」ということから「知的な居場所」がキーワードになりました。

この図書館は椅子が全部異なります。好きな椅子に座って本を読んでくださいということです。最先端の文化施設が出きまして、金沢はクラフト分野で創造都市に入っているのですけれども、美術館や図書館が創造都市の要素としてとても大事になってきます。

横浜の話もちょっとだけ付け加えます。「クリエイティブシティ・ヨコハマ」これは 2004 年、つまり金沢に 21 世紀美術館ができたその年の春に横浜市は「文化芸術都市創造事業本部」を置き、創造都市推進課を設置しました。野田先生が初代の推進課長に就かれました。日本の自治体で創造都市推進課ができたのは横浜が最初で、その初代課長が野田先生です。ということで、私と野田さんと二人三脚で日本の国内や海外にいろいろ視察にまいりました。

横浜は BankART という非常に印象的なイベントと現代アートのヨコハマトリエンナーレ、この二つがやっぱり印象があります。さらに初代の東アジア文化都市事業もやっていただきました。願わくは建築の分野で、ユネスコ創造都市に、ぜひ加わっていただきたいと、密やかな願いを持っている次第です。

少し時間をオーバーいたしました。どうもご清聴ありがとうございました。

## パネルディスカッション

**◆コーディネーター**

**野田邦弘氏**
（のだ　くにひろ）

**横浜市立大学大学院都市社会文化研究科客員教授**
**東京大学まちづくり大学院非常勤講師**
**茅ヶ崎市文化生涯学習プラン推進委員長**

2004 年まで横浜市職員として主に文化行政に携わる。2003 年には横浜関内地区再生に向けた都市政策「クリエイティブシティ・ヨコハマ」の策定を担当。翌年新設された文化芸術都市創造事業本部創造都市推進課の初代担当課長に就任し、横浜トリエンナーレ 2005 を担当した。2005 年鳥取大学地域学部教授に就任。2021 年より現職。文化経済学会＜日本＞顧問、茅ヶ崎市ユネスコ創造都市加盟申請アドバイザー。著書は『アートがひらく地域のこれから―クリエイティビティを生かす社会へ』（共著）、『文化政策の展開』『創造都市横浜の戦略』『イベント創造の時代』など。

**◆パネリスト**

**明石　英嗣氏**
（あかし　えいじ）

**公益財団法人 吉備路文学館館長**
**文学創造都市おかやま推進会議委員**

1962 年山口県下関市生まれ。1986 年、早稲田大学教育学部教育学科社会教育学専修卒業後、中國銀行に入行。詫間支店長、北備ブロック長兼総社支店長などを歴任して 2015 年公益財団法人 吉備路文学館常務理事館長に就任。主な公職に岡山県博物館協議会 監事、内田百閒文学賞 運営委員など。

**岩崎　武史氏**
（いわさき　たけし）

**鳥取県立図書館 資料課 課長**

1978 年佐賀県生まれ。2004 年 5 月、司書職として鳥取県入庁。智頭農林高等学校、鳥取東高等学校で勤務後、2012 年 4 月に県立図書館へ異動。情報相談課図書担当・同相談担当、支援協力課くらし産業支援担当・同市町村担当を経て現在。書籍・雑誌購入業務の総括のほか、図書館システムやデジタルアーカイブシステムを担当。

**音喜多 信嗣氏**
（おときた　のぶつぐ）

**八戸ブックセンター 所長**

1994 年 4 月、八戸市庁採用。八戸市職員として健康福祉部、経済部、総合政策部、農林水産部に配属後、2016 年 4 月に中心市街地活性化及び八戸ブックセンターの開設を担当する、まちづくり文化スポーツ観光部まちづくり文化推進室に配属。2016 年 12 月の八戸ブックセンター開設と同時に所長となり現在に至る。

# 「本のまち八戸」の推進

**野田**　それでは早速後半の部を始めます。先ほど佐々木先生から創造都市とは何かということをご紹介いただきました。これは特にイギリスを始めとしたヨーロッパの工業都市で、工業が衰退したため、大量の失業者が生まれました。その結果犯罪が増え、治安が悪化して地域経済が崩壊します。

そのような都市のなかで文化・芸術に取り組む事例が見られるようになります。例えばグラスゴーが有名ですが、荒れた倉庫街にいろいろ手を加えてギャラリーにしたり、ディスコにしたり、カフェにしたり、文化創造や交流の場所にしていく。そうすると、なぜか若いおしゃれな連中が集まってくるようになりました。このような事例を本格的に研究しようと 20 世紀の末ぐらいからどんどん文献が出てきて、日本でも 21 世紀になって先ほど佐々木先生からご紹介があったように金沢、横浜から始まったということです。

ファッション協会さんも、こういった取り組みをもう永年やっておられますし、私も協力させていただいています。今日は特に「本」ということにこだわって企画が立てられていますので、先ほどご紹介のあった 3 名の方に来ていただいております。早速、お一人お一人から自己紹介を兼ねて活動の内容をご紹介いただければと思います。その後、ディスカッションをしますが、まず明石さんからよろしくお願いします。

明石英嗣氏

**明石**　はい、皆さんこんにちは。改めまして吉備路文学館の館長をしております明石と申します。まず最初にお断りをさせいただきます。先週あたりから周りの人から、来週は青森の八戸に行くそうだけど、青森は大雪よ、大雪で寒いよという話を聞いていて、寒い寒いと思っていたら、岡山で先週風邪をひきまして、大変お聞き苦しい声になっておりますけれども、どうぞご容赦いただければと思います。

それでは着座をさせていただきまして、「文学による心豊かなまちづくり、文学創造都市岡山」の取り組みということで、岡山市に吉備路文学館という博物館があるのですけれども、そういったことからお話をさせていただこうと思います。

まず吉備路文学館といういわゆる博物館とまちづくりということですが、ここの八戸にも先程来、美術館のお話がありましたし、美術館の歴代の館長さんもとても素晴らしい館長さんだとお聞きしております。それから私達と同じ文学館ということから言うと、青森県立文学館が青森市にあったと思います。そういった文学館とまちづくりということについてお話をしたいと思いますが、まず私達の吉備路文学館について、皆様にお配りしてある 4 つ折りのパンフレットを見ていただくと、わかりやすいかなと思います。

4 つ折りですのでパラパラと広げていただくと、左のところに書いてありますが、まず岡山県全域および広島県の東部、福山や尾道という地名があるところなのですが、これを備後地区というふうに呼んでいて、そこを「吉備路」というふうに定義をいたしまして、吉備路ゆかりの文学者を顕彰する文学博物館として、今から 39 年前の 1986 年 11 月に開館をいたしました。こちらの八戸市や青森県もそうだと思いますが、大概の博物館というのは県立や私立、町立など、いわゆる自治体が運営しているのですけれども、私達の吉備路文学館は民間の博物館でございます。お金はどこが出しているのかというと、岡山の地方銀行である中国銀行にスポンサーとして資金を出していただいています。

昨年、博物館法改正による登録博物館に再認定を受けています。まず、先ほどのまちづくりとの関係で言いますと、この博物館法は戦後制定され、70 年ぶりに改正をされました。令和 5 年 4 月 1 日の施行でございまして、多分八戸の美術館やいろいろな博物館も、これに沿った形で再認定を受けておられるのではないかと思います。今回何が改正されたかという、その一つをご紹介いたします。第 3 条の中に、地域の多様な主体との連携、協力による文化観光その他の活動を図り、地域の活力の向上に取り組むことを努力義務とするということで、努力義務とは言いながら初めてこの法律の中に、要は地域の活性化の役に立ちなさいということが明文化をされております。ですから、博物館として地域活性化にいかにして貢献するかということで、この文学創造都市岡山推進会議に運営委員として参加させていただきました。

岡山市は、ユネスコ創造都市の認定を受けましたが、これは文学創造都市岡山推進会議の中で議論されたミッションの一つでございます。まず令和 4 年ですから今からちょうど 3 年ほど前に、地元の出版社や大学関係者、それから我々のような文化団体が要望書を岡山市長に提出をして、文学創造都市、文学による心豊かなまちづくりを岡山市として進めていきませんかというご提案をするという流れで、お話が進んでいきました。

この要望書に対して岡山市は、児童文学作家の坪田譲治先生を顕彰する「坪田譲治文学賞・岡山市文学賞運営委員会」の部会として「文学によるまちづくり部会」を発足いたしました。

この「文学によるまちづくり部会」の中で、ユネスコ創造都市ネットワークの文学分野での新規加盟認定を目指すということが一つのミッションとなりまして、我々委員はあまり何もしていないのですが、岡山市の文化振興課、今日も 1 人来ておりますけれども、職員が毎晩徹夜をしながら、英文と日本文の両方を書きながら、それから先ほどの佐々木先生のような先生方からいろいろなご助言をいただきながら手続きを進めてまいりまして、見事認定を受けたということでございます。

どんなことを事業としてやっていくのか、主催事業、協働事業、提携事業、参加事業というふうに分けております。これは何を言いたいかというと、お金をどれだけ出していくかという部分で分類されたと思っていただいていいと思います。主催事業というのは、当然岡山市が特に主催としてやっていくわけですから、こちらはお金の工面をしていかなければいけないということになります。それから協働事業も一部は自治体の方でお金の負担をしていく事業です。そのあとの提携事業なり参加事業というのは、例えば吉備路文学館は民間の博物館ですから、私達が何かこれのためにやろうとするところについては、名義としては文学創造都市岡山の事業としてやりますけれども、提携事業としてやります。従ってお金は出していただかなくて結構ですというものになります。

それ以外に、ユネスコは対象が「シティ」です。岡山というと、岡山県なのか岡山市なのかという話になってきます。ユネスコが決めているのはシティなのですが、作家さんがいるところというのは、岡山県内のいろいろなところにいるわけですね。そうすると岡山県の例えば倉敷市というところがありますけれども、倉敷市にゆかりのある作家さんを岡山市が顕彰しないのか、文学創造都市は顕彰しないのかと言ったら、それは違うわけで、そうするとやはりその市町の区割りで言うと、倉敷市にも参加していただかなければいけなのですけれども、どうしてもこういう協働事業や主催事業など、市と市が一緒に絡んでやるというと、いろいろなハードルが、予算の問題などがありますので、こういったものは参加事業という形になっています。

これが今後うまくいけば、岡山県全体、岡山の地域全体として、そういう盛り上がりができるのかなと思います。

それから一例ですけれども、「岡山文学フェスティバル」といいまして廃校になった小学校を文芸小学校と名づけて、こちらでイベントをやっております。これが 2023 年と 2024 年と 2 回開催しましたが、大体 5000 人ずつぐらい参加をしております。「おかやま ZINE スタジアム」といって、要は自分で本を作ってその本を販売していこうという取り組みですけれども、これもどんどんブースが増えてきておりまして、今 100 ブースぐらいあります。

これは商店街を使ったイベントで「おかやま表町ブックストリート」といいます。岡山市の中にもいくつか商店街があるのですけれども、その商店街を使ってブースを作り、自分の思いのある本を、また次の人に引き継いでいく、販売していくという取り組みです。

事例:おかやま表町ブックストリート　表町商店街(2024年3月)

それから岡山出身の作家の方がたくさんいます。皆さん方がご存知の方だと芥川賞作家の小川洋子さんや、岡山市から北の方へ行きますけれども重松清さんなどがいらっしゃいます。実は乗代雄介さんは今回の直木賞にも候補者として選ばれまして、直木賞の候補に

なったのがこれで 5 回目だと思います。直木賞は新人賞なのでそろそろ受賞されるかなと思ったのですけれども、残念ながら今回も逃しました。スケッチで絵を書くように文章を書くというのが、この人の作家としてのやり方で、岡山にある川の近くなどでスケッチを文章で表現していくというワークショップを開催しました。

人に読んでもらうような文章はどういうふうに書くのか、物語はどういうふうに書くのかということは、なかなか学校教育の中では教えてもらえないので、児童文学作家の村中李衣先生などの作家の皆さんにレクチャーをしていただいています。この中で面白いのは、物語を書くのに、「そ」の付く言葉を使わない。例えば「そして」や「それで」「そのうち」などといった繋ぎ言葉というのは、物語では使わないとおっしゃっていました。確かにそうだなと思いながら聞いていたのですけれども、今、受講生が 30 名ほどいます。あとはアジアの子供たちに絵本を届けようという取り組み、これは NPO 法人がやっているのですけれども、これに乗って、子供たちにお手伝いをしていただくような事業を岡山県立図書館で行っております。

ユネスコ創造都市ネットワークについては、先程来、両先生のお話がございましたので割愛させていただきますけれども、岡山市が、加盟の意義ということで「ネットワークを通じた国際的な都市間交流を通して、市民が多様な文化に触れ文化的な刺激を受けることを目指すとともに、各事業に官民一体となって取り組み、地域活性化を図る」とあります。岡山市の大森市長さんとお話をする機会が私もありまして、ユネスコのネットワークに加盟する一番の狙いは何ですかと伺ったところ、「岡山市の職員の皆さんに国際化に目を向けてもらいたい。それが一番の狙いです」と市長がおっしゃっていました。なるほどと思いました。地方都市でありながら、やはりこういったことに目を向けることが大切なのですね。それから海外の事業としてトークイベントをやっておりまして、やはり文学創造都市岡山として、「文学の町何々」というふうにやるからには、それに対する期待に応えてこんなことをやっていきたいという思いをしっかり持っていかなければいけないと思っております。

皆様方に「うったて」という冊子を 1 冊ずつお配りしております。これは市民ライターの方が書いたもので、創刊号 1 万部があっという間に無くなりまして、その後また増刷をしております。この 2 月には第 2 号が出る予定になっております。

他市の情報ですけれども、群馬県前橋市で糸井重里さんと、眼鏡の JINS という会社があるのですが、そこの田中社長さんが、前橋を何とかせなあかんということで立ち上がられまして、ブックフェスティバルをやっておられます。

そういったことでこの八戸も素晴らしい本のまちになるのに、何かお手伝いができればと思っておりますし、ぜひ私どもも参考にさせていただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

**野田**　ありがとうございました。岡山市は民間がリードしながら市に要望書を出したことがきかけとなり、ユネスコ創造都市認定につながりました。岡山はアートで有名なので、アートでいくのかなと思っていましたが、文学分野で認定されました。

続けて鳥取県立図書館です。私も鳥取大学にしばらくいましたので、県立図書館はずいぶん利用させていただきました。ちょっと宣伝させていただくと、「ライブラリ・オブ・ザ・イヤー」という日本の図書館を表彰する NPO がありまして、図書館の賞としては一番権威がある賞だと思いますけれど、これの第 1 回を鳥取県立図書館が受賞しています。それから十数年間で都合三つ受賞しています。お話を聞いていただいたらわかると思いますが、鳥取県の片山前知事が、図書館は

民主主義の基盤だと言っていたのですね。1 人当たりの図書購入費は全国一でした。今でもそうかもしれませんが、鳥取県立図書館の岩崎さんに登壇していただいていますので、鳥取県立図書館がどういうことをやってきて、どういうことを将来考えているのかということを若手のホープである岩崎さんからお話いただきたいと思います。

**岩崎**　よろしくお願いします。鳥取県立図書館の岩崎と申します。タイトルにつけております「県民に役立ち地域に貢献する図書館」は鳥取県立図書館のミッションになっておりまして、職員全員がこの目的に向かって仕事をしていくというものになっております。

岩崎 武史氏

今回まちづくりというテーマなので、図書館がなかなかなじまないところもあるかと思うのですけれども、図書館という機能を通じて本と県民をどうやって繋げていくかということを少しお話していければいいかなと思っております。

まず、自己紹介をさせていただきますと佐賀県鳥栖市出身で、今は鳥取で仕事をしております。2004 年に司書職といいまして図書館の専門職員として採用されました。高校図書館の勤務後 2012 年に県立図書館に異動となっております。鳥取県では県立高校に専任正規で学校司書を配置しておりまして、その中の採用の 1 人となっております。現在は資料課というところで書籍や雑誌の購入業務等の総括を担当しております。

少し鳥取についてイメージをもっていただくために数字を用意しております。人口がおよそ 54 万人、青森県が 120 万人ということで半分程度。19 市町村ありますが、青森県は 40 市町村ということでこちらも大体半分程度というような規模になっております。主な観光地といたしまして鳥取砂丘や水木しげるロードなどがあり、特産品としては松葉ガニ、二十世紀梨があります。

図書館の話を少ししますと、現在、蔵書数が約 130 万冊になっております。実は図書館蔵書点検といいまして、現在棚卸作業中で、今、本のバーコードを 1 冊ずつなぞっている作業を図書館で行っておりまして、ちょっとそこを抜けさせてもらってここに来ているというような状況です。年間の来館数が 22 万人、職員の数が 48 人、うち正職員が半分程度というような図書館です。資料購入費、書籍やら雑誌やら新聞やらの資料購入の合計が大体約 1 億円程度の予算規模を持っています。左が鳥取砂丘で右が鳥取県立図書館の姿です。築 34 年程度経っておりまして、地上 2 階地下 2 階の 4 階建ての構造になっています。地下の 2 階部分が書庫という作りになっています。最近、県内の書店との連携ということでよく取材を受けることがあります。少しこのことについて説明をしたいと思います。鳥取方式の図書購入という言われ方をしております。何をやっているかといいますと、シンプルに地元書店からの購入を原則とし、地元書店から購入できない資料、例えば外国語で書かれた本のみ地元外の書店から購入するという基本方針を立てております。令和 5 年度は約 2 万 2000 冊の購入資料があったのですけれども、金額ベースで 1 億円のう

**鳥取方式の図書購入**

- 地元書店からの購入を原則とし、地元書店からの購入ができない資料（外国語図書など）のみ地元外の書店から購入している。
- 令和5年度は約22,000冊、資料購入費およそ1億円のうち金額ベースで92%を地元書店から購入。
- ベストセラーでも複本の大量購入はしない。（多くても2冊：来館者用・市町村立図書館等用）

ち 92%は地元書店から購入しております。

残りは外国語図書や直販で買うしかない図書になっております。ベストセラーに関しましても基本的に複本の大量購入はしません。あくまで来館者様、もしくは市町村の支援用ということで最多 2 冊までという方針を立てております。郷土資料は別になるのですけれども、あと電子書籍に関しましても地元書店から購入しておりまして、これもなかなか他県では見られない事例かなと思っております。

これが始まった経緯につきましては、鳥取県立図書館は 1990 年に現在地で開館していますが、この時期も鳥取県内に関しては書店の減少であったり、書店の賑わいが見られなかったりということで、非常に図書館の職員自体が危機感を持っていたという状況がございます。そこで何かできることはないかということで、県内書店から購入することによって、書店の維持を図ろうということと新刊書などは図書館だけでなく書店でもきちんと見てほしい、そういった機会を担保するために図書館では地元の書店から本を買おうという方針を立てたということになっております。

蔵書の選び方としまして、基本的には書店の持ち込みに関して現物を見て選ぶものと、出版データをもとに職員が選書した本を地元書店から購入するという方式を立てております。職員は週に 2 回、各書店から持ち込まれた本の中から図書館に置く本を選びます。各書店から見ますと月に 1 回程度は県立図書館に本を持ち込むという流れで行っております。基本的には現物で中を見て本を選ぶということを重視している図書館です。

市町村との棲み分けの話になりますが、基本的には市町村立図書館では購入が難しい、例えば学術書専門書や比較的高額の本は県立図書館の方で購入しております。逆に一般書、入門書といった比較的手に入りやすい本に関しましては市町村立図書館で購入していただく。完全に分担できるわけではなく、一部重なるところがあるということで蔵書を構成しております。

あと本をどう届けるかということになってくるのですけれども、鳥取県は図書館設置率 100%の数少ない県になっています。2015 年に達成いたしました。実際 47 都道府県中 5 県しか図書館設置率 100%のところはない状況になっております。システムとしましては、申し込みから原則 2 日以内に近くの図書館に本が到着するような物流システムを整えております。もちろん県立から市町村だけではなくて市町村間の相互貸借という言い方をするのですが、貸し借り貸し出しに関しましても、県立図書館の物流システムを使ってきちんとくまなく本が行き渡るシステムを作っております。市町村立図書館だけではなくて大学図書館や専門の図書館等々の本も、この物流の中で動いて県民の皆さんに本が届くようなシステムを作っております。図書館は地域の情報インフラと書いておりますけれども、我々図書館の職員はきちんと選んだ本をいかに早く届けるかというところが重要だと思っております。それは仕事に役立つ本であったり、医療や健康に直結するような情報であったりとかですね。きちんと正確な本、確かな本をいち早く届けることが大事なことかなと思っております。あとインターネット上の情報は、誰でも入手できる情報で、そこがベースであるという言い方をされる方がよくいらっしゃいまして、それ以外の情報源を知っているかということが差別化の上で大変重要なのかなと思っております。

続きまして書店との連携の話を少しさせてください。鳥取県図書館協会という団体があるのですけれども、その中で「本・書店・図書館にまつわるエピソード大賞」を実施しております。今年度で第 8 回目と 8 年ぐらいの年数が経過しているものになっています。図書館協会に関しましては鳥取県書店商業組合の方も会員や理事の立場で参加いただいておりまして、書店のエピソードの募集に関してご協力いただいているところでございます。書店のエピソードとしましてはサイン会で作家さんに声をかけていただいて非常に励みになった、頑張って書いている、自分で書

いた本を書店にも置いてもらってすごく嬉しかったというエピソードが集まってきております。

また、「まちの本屋を考える」というイベントを、1 月 12 日に開催をいたしました。こちらに関しましては本の学校というNPO法人があるのですけれども、そちらの主催に図書館として協力したという形になっております。内容としましては、令和 6 年、今年度に新しく本屋を開業された方と永井さんといいます鳥取県内の書店を長く経営された方の対談形式で行いました。実際に書店を開業予定の方、今現在書店を経営されている方、出版を行われた方に参加いただきまして、非常に生々しいと言いますか、例えば取次の保証金の話であったり、利益率の差の話であったり、リアルかつ小規模な会だからこそ聞けるような話を聞くことができました。この中で出たアイディアとしましては、例えば個人書店に関して情報が少ないということがありました。個人書店の特徴をまとめたマップを作ってほしいというご意見もいただいて、前向きに検討しようという話もございました。

また、書店と図書館は競合関係でよく語られることがありますが、我々の立場としてはこんな感じで考えております。一般的な話になるのですけれども、書店は新刊をいち早く現物で確認して購入できる場所、対して図書館はきちんと本や資料を収集整理保存し、年数が経過しても利用できるようにしておく場所ということで、そもそも役割分担が違うと思っております。とはいえ情報を皆さんに提供する仲間であって、どちらもやっぱりなくてはならない存在かなと思っています。図書館の立場としては書店で購入する本、図書館で借りる本といった使い分けをしていただくと非常にありがたいと思っておりますし、図書館は書店の良い顧客でありたいという書き方をしていますが、やはりお客さんとして、きちんと書店を支えていくことも大事かなと思っております。

最後のスライドになりますけれども、課題を少し書いております。デジタル化の進展によって本や情報の入手方法は大きく変化ということがもちろんあります。スマートフォンが普及し、GIGAスクール、デジタル教科書、学力テストも端末で行う時代になっておりまして、紙に印刷されたものに触れる機会も多分子供の頃からどんどん少なくなっていくのだろうという危機感がございます。書店・図書館共通の課題としても読者、本を手に取る人という書き方をしておりますけれども、そこがいないと書店はおそらく潰れてしまうという実感がございますので、そこを何とかしたいと思っております。なかなか具体的なアイディアが出ないところなのですけれども、やっぱり身近に本があって、本を読む人が周りにいるという環境がないと、おそらく「本のまち」ということも実現しないのではないかと思います。

今回この会を通じて何か持ち帰れるものがあったらいいと思っております。鳥取県内でも町が書店を作る動きがございまして、八戸市の取り組みをぜひとも参考に持ち帰って報告したいと思っております。駆け足になりましたけれど、こちらからは以上になります。

**野田**　ありがとうございました。それではお待たせしました地元八戸市から、八戸ブックセンターの所長音喜多さんにご報告と、提言をお願いしたいと思います。

音喜多 信嗣氏

**音喜多**　八戸ブックセンターの音喜多です。よろしくお願いいたします。

本日は日本ファッション協会の皆様に、このようなシンポジウム開催いただきましてありがとうございます。私の方からブックセンターの開設に至った経緯、これまでの取り組み内容などをご紹介させていただきますけれども、今日の成果を踏まえて今後の運営や、「本のまち八戸」をよりよくするために参考にさせていただければと思っていますので、よろしくお願いいたします。

八戸ブックセンターは公設書店という全国的にも珍しい施設としてオープンしております。オープンする 2 年前から八戸市が取り組んでいる「本のまち八戸」という施策に基づいており、この「本のまち八戸」という取り組みは、子供から大人まで全世代に向けた本を活用したまちづくりとして、2014 年度から市が取り組んできているものです。この世代に応じた事業展開として、それこそ図書館、あとは民間書店などの本に関係する施設などと連携しながら、当初は子供向けの事業に力を入れてきました。その後 2016 年 12 月に、当時は中学生以上の大人をメインのターゲットとしておりましたけれども、八戸ブックセンターが開設しております。

八戸ブックセンターは、全国でも珍しい公設公営の書店という機能を持ち合わせた公共施設です。この後ちょっと詳しい紹介をさせていただきますが、在庫数が約 1 万冊で施設面積が大体 100 坪と規模としてはそんなに大きくはない施設であります。本や読書、そういったものに関する取り組みを行う公共施設となりますと、まず真っ先に思い浮かべるのが図書館だと思います。八戸市にも図書館が 3 館ありまして移動図書館車も保有しております。先ほど鳥取県立図書館の岩崎さんからもお話がありましたけれども、図書館は収集、保存、提供そういった役割を持っていますので、町の中に必要な施設です。

ただ図書館で本を借りて読むというだけではなく、八戸市としては買って自分のものにして読んでもほしいと、そういった体験も重要であるという考えから、書店の機能を持たせたまちづくりの拠点施設という位置づけでこのブックセンターを開設し、図書館ではちょっと実施しにくいサービスを提供する場としての役割を担っております。

まずそもそものところになりますけれども、なぜ行政、市が本の販売をするのかというところになりますが、まさに様々な要因があります。一つは全国的な傾向として、書店が減っている。最近であれば、独立系書店と呼ばれているような、古書店を含めた特徴的な選書をするお店というのは増えてきていますけれども、いわゆる一般的な書店はもちろん減ってきていて、特に大型書店のない地方においては、経営上の観点からどうしても売れ筋を扱わざるを得ないという状況になっています。

書店は知的情報インフラでありまして、書店がなくなると、大型書店がある大都市圏と八戸のような地方都市との文化的環境の格差がますます大きくなってしまう、そういった懸念があると思っています。

図書館だけではなく、本との偶然の出会いを創出するという言葉をいつも使っておりますけれども、そういった本を購入することができる書店が町には必要であると思います。現在の状況を鑑みると、本と出会う場所の選択肢を公共サービスとして提案することが必要だと考えております。そこで八戸市は本を買って手に取るという体験を、まちづくりの施策として提案したいとい

うことで運営しておりますけれども、まずは図書館とは違った本との偶然の出会いを作りたい、そういった考え方で市内の民間書店とできるだけ取り扱いがかぶらないように、そしてさらには補完するような、そういった選書を心がけて、先ほどの大都市との文化的格差の課題を解消したいという考えで運営を行っております。

一部、棚を写真でご紹介したいのですが、LGBTQ などの普及活動をしている団体にご協力いただきながら作った棚になります。このように様々な団体や施設と連携をしながら、そのときに読んでほしい本を並べるという「フェア棚」を設置したり、館内全ての棚にテーマを設定して、そのテーマに沿った本をそこに並べたりということを基本にした陳列をしております。

私達の思いとしては館内をぐるりと見て回って、気になるテーマや 1 冊に出会ってほしい、その気になる一冊を見つけるとその周りには関連する本が並んでいるので、そこから様々な方向にも進んでほしい。そういった思いを込めて選書陳列を行っております。

次に館内の設備を簡単にご紹介させていただきます。まずブックセンターは書店ではありますけれども、本とゆっくり向き合って、まずは読んでほしいという考えで運営しています。ですからハンモックや、1 人籠って読めるような本の塔と呼んでいるような、ゆっくり本を読める場所や立ち読み座り読みができる場所を作っています。ドリンクの販売などもしておりまして、ブックセンターでは時間が許す限り、自由に読んでもらって、そして最後に気に入った本があったら購入してくださいというスタンスです。この点は民間書店とは違って購入については目的の 2 番目にしています。これも公共施設だからこその考え方で、こう考えると書店と図書館の間のような施設かなという感じがします。

そして「読書会ルーム」もあります。読書会を行っている団体が複数市内にありまして、そちらへの貸し出しを行うほか、私達が実施するイベントで使っていて、月に 10 件ぐらいの利用があります。また、カンヅメブースと呼んでいる執筆専用の部屋があります。2 部屋作っておりますけれども、やはり本というのは、「読む」だけでなく「書く」ということもありますので、それに何かお手伝いできないかということで設置しました。何かを書きたい人、発表したい人、そういった方に、最初に登録だけはしてもらっていますけれども、空いていれば何時間でも無料で使える部屋になっています。現在こちらの登録が 340 人ぐらいいる状況で、ほぼ毎日誰かしらが利用しているような感じです。ここを使って書いた本が出版までいったケースも何冊か出ているなど、徐々に効果も出ています。

次に先ほど本の販売という話をしましたけれども、ブックセンターは本の販売と企画事業イベントを中心に運営している施設です。簡単にご紹介させていただきたいのですが、まず初めにブックセンターの基本方針というものがあります。一番目が「本を読む人を増やす」で、これは全国の自治体であれば図書館や教育委員会といったところが中心になって動いているところだと思います。そこと併せてブックセンターについては、先ほどもカンヅメブースで触れましたけれども、「本を書く人を増やす」と最終的には「本でまちを盛り上げる」と 3 つあって、あくまでもまちづくりの施設として、今までもそしてこれからも運営していきます。

これらの基本方針に則った事業を簡単にご紹介させていただきます。まず一つは作家さんや編集者とデザイナーさん、地元の大学の先生、それから文化施設の学芸員さんなどをゲストに招いたトークイベントを実施しています。これはいろいろな方面の専門家から本にまつわるお話を聞くことによって、あらゆる視点からの本への興味喚起に繋がっていくという事業になります。次に執筆出版ワークショップと呼んでいますけれども、これは書く人を増やすための取り組みの一つで、写真はショートショート作家の田丸さんをゲストに招いたときのイベントですけれども、特に若い方については、できるだけ体験できるような企画を中心に実施していまして、書く、作るそして形になるという楽しさの体験に繋がるようなイベントになっております。

次にギャラリー展示もやっておりまして、2 ヶ月から 3 ヶ月を一つの会期にしながら、本にまつわる様々な展示を行っています。絵本の原画展のようなもの、ブックアート作品、美術館と企画展を連動させてのイベントなど様々な展示を行うことによって、ブックセンターに来てもらうきっかけになってほしいと考えて様々に開催しております。ギャラリー展示をきっかけにブックセンターが版元になって、本を出版したというケースも一度経験しております。

次にパワープッシュ作家と呼んでいますけれども、八戸市や近隣出身在住の作家さんが本を出しましたといったときに、私達でいろいろなイベントを通して盛り上げていきましょうという企画も行っています。これもここの「はっち」を使ったり、様々な広い場所を使ったり、いろいろなところに出向いていったりというような形で行っています。市内の民間書店さんと一緒になってフェアを組むというようなことも、私達が中心になって動いているところです。

「本のまち八戸ブックフェス」という大型イベントを、「はっち」や「マチニワ」、ブックセンターをメイン会場にして行っています。これも結構認知が高まってきていまして、様々な多くの方に来ていただけるようなイベントになっています。

次に「ブックサテライト増殖プロジェクト」と呼んでいますけれど、これは街中全体の取り組みになっておりまして、ちょっと時間を過ごすような場所、カフェであったり何かの待合室であったり、そういったところに私達が作っている木製の本箱をお渡しして本を入れていただき、どこに行っても本があるよねというようなまちにしたいと取り組んでいるところです。これについては、そこのお店や施設にあった本を私達が選書して、箱の中に入れるという取り組みをしていて、対象店舗が徐々に増えてきている事業になっております。

さらに、様々な民間書店ができないような、特に若い人たちに向けた本に関する企画を教育機関と一緒になって連携した事業も行っています。各学校を訪問して、例えばブックトークや、ワークショップを行うなど、とにかく若い人が楽しみながら体験できる企画を提案するようにしています。

そして最後にまとめさせていただきますが、ブックセンターがオープンして 8 年が経過しました。この間にやはり書店は減っております。10 年前には市内に 18 店舗あった書店が今現在 10 店舗まで減少しております。書店文化を守るということもブックセンターの役割と考えておりまして、民間書店との棲み分けをもちろん図りながら、今読んでほしい本を私達は提案して、併せて公共施設という強みを活用して民間書店同士が連携するためのハブとしての役割を担っておりますので、時に民間書店などとも一緒になって本に触れるきっかけとなるイベント企画事業を開催し、そういったことによって本を読む、それから書くということに対する興味喚起に繋げています。

これによりまして、少しずつではありますけれども、読む人、書く人、そういったものの底上げとなって、書店文化を守るということに貢献しているのではないかと認識しております。今回の具体例としまして、館内の読書会ルームを定期的に利用する団体が大変増えてきております。さらに読書団体だけでなく、ブックセンターをきっかけに、最近では「HACHINOHE ZINE CLUB」という ZINE を作っている方の新たなコミュニティもできております。こういった方々の他に、先ほど申し上げたカンヅメブース、書くための部屋ですね。こちらを使っている方が、実は今年の元日に発表された東奥日報社主催の「東奥文学賞」の大賞を受賞するという嬉しいニュースも入ってきております。

**八戸ブックセンター開設の役割、効果**

（1）書店文化を守る

**①民間書店の品揃えの補完**
**②民間書店連携のハブとしての役割**
**③本に触れるきっかけとなる企画事業の実施**

↓

**・本を「読む」「書く」ことへの興味喚起**
**・「読む人」「書く人」の底上げ**

（具体例）
・読書会ルームを利用した読書会などの定期開催
・カンヅメブース利用者による出版など
（2025年 第8回東奥文学賞大賞受賞）
・HACHINOHE ZINE CLUBの継続的活動

もう一つの効果、地域活性化についてになりますけれども、まずブックセンターがハブとなって、書店の他にも教育機関や文化施設、民間の飲食店などとも一緒に連携してイベントを実施しております。これらによって、順調に来館者は増えてきています。こういったことから地域活性化の一助になっているのかなと考えております。

またブックセンターが書店機能を持ち合わせた公共施設という特異性もありまして、昨年度令和 5 年度は 500 名、会館以降 550 件、およそ 4000 人を超える、自治体や議会による視察、教育機関の研究など、全国から多くの方に来館いただいております。こういったことも地域内の観光需要にも繋がっているだろうなと考えております。このように八戸ブックセンターは、単なる書店ではなく、まちづくりを起点にした観光コンテンツとしても期待できる本好きを増やす取り組みを行っている施設になっております。

もちろん図書館は町に必要な施設ですけれども、図書館にとどまらない本に触れるきっかけをつくる場の選択肢を増やすということが、八戸のような地方都市においては公共サービスとして絶対に必要な事業なのだという考えで運営しております。さらに 2022 年 9 月に八戸ブックセンターを参考にして、図書館や書店のある自治体では 2 例目になる公設書店が福井県の敦賀市にオープンしました。このように公設の書店という考え方、必要性が浸透していくことにも期待しながら、これからも図書館だけでなく民間書店を始め様々な施設や人と連携を図りながら運営を続けていきたいと考えております。

ちょっと早口になってしまい申し訳ないですが、以上で私の報告を終わります。

**野田**　はい、ありがとうございました。それではこれからは今、発表をお互いに聞かれた上で、フリーで結構ですから、パネリストの方々相互に質問でも意見でも、ツッコミでも何でもいいですからありませんでしょうか。ポイントとしては、八戸の取り組み、鳥取図書館の取り組み、岡山の取り組みなどについての質問でもいいですし、これはどうなっているの、こうしたらいいのではないかといった意見交換を自由にやりたいと思います。順番は決めませんので、どうぞご自由に。まずどなたからでも手を挙げていただければ。はい、岩崎さん。

**岩崎**　八戸ブックセンターに質問です。ちょっと言いづらいのですが、今、書店の利益率の低さということを聞くことが非常に多いのですけれども、公設の施設としてそのあたりをどのように

考えているのかということと、取り組みに関しては、全国的には図書館がやっているようなことも数多くされているようですけれども、その棲み分けというか、考え方を教えていただけたらと思います。

**音喜多**　まず八戸ブックセンターには、先ほど最後の説明の中に入れましたけれど、多くの方に視察に来ていただいています。自治体であったり議会であったり、そういったところからの視察の最後の質問で一番多いのが、経費予算についてですね。その部分はどうなっているのですかというのが一番多い質問です。まず私の説明の中に入れましたけれども、あくまでも八戸ブックセンターは公共施設、公共サービスとして、本を好きになってもらいたいという考えですので、利益を追求はしていません。これが本を販売しているのに利益を取らないとはなんだという、ちょっと矛盾している部分があるかもしれませんが、私達の考え方は、本を手に取ってもらうためのきっかけ作りですので、採算というのは正直ブックセンターで取れることは100%ないと思っています。

だからこそ、公共サービスとして必要な事業で、これがゆくゆくは民間の書店さんの売り上げに繋がってほしいという考え方で私達は運営しています。ですので、読者を増やす、本好きな人を増やす、そういった取り組みをすることによって、書店が盛り上がるというような考え方になります。これが解答になっているかどうか難しい部分ですが、このような目的でも公金を投入するべきという判断で、8年間続けている状況です。

あともう一つ、図書館との棲み分けというのは、自治体によって図書館が行っているような事業を、私達ブックセンターが行っているものもあると思います。ただそこはその自治体の事情というものもあると思います。私達はそもそもの基本の部分として、本を貸すか売るかというところがまず違っているので、そこは明確な棲み分けになると思うのですけれども、その他、イベント企画を運営するにあたって、私達の書店の立場としての動き方というのは強みだと思っています。例えば作家さんをお呼びして本を販売しながら、サイン会を行いながらイベントをするというのは、やはりお客様にとってもより面白みのある部分に繋がると思っています。今現在、八戸市で考えているのが図書館でできることと、ブックセンターでできることは明確ではないにしても、お互い連携しながら行っているという、そういった考え方ですね。

**野田**　岩崎さん、どうですか、よろしいですか。

**岩崎**　はい、わかりました。

**野田**　他に明石さん、何かございませんか？

**明石**　私は今の鳥取の図書館の方が言われたように、やっぱりちょっと半信半疑な気持ちがあったので、実は今朝、音喜多さんのところへ伺ってまいりました。やっぱり行ってみればわかると言いますか、どういう表現をしたらいいのかわからないのですけれど、昔ながらの本棚がずらっと並んで、たくさんの本が置いてある本屋さんというイメージではなくて、最近、東京や都会のちょっとした街角に、なにか本にこだわったような本屋さんというのができていますよね、それの少し大きいバージョンと言ったらいいのですかね。

だから、冒頭ファッション協会の専務さんがおっしゃられた一般の本屋さんに置いているよう

なよくみかける雑誌などは置いていなくて、むしろ皆さんが本を選定するのにこだわってこだわってこだわり抜いた、テーマを決めてこだわり抜いたものを置いているから、そういう意味ではすごく特徴的な選書になっていますね。それには今おっしゃられたように、採算を見たら多分できないと思います。本を売っても、2 割から 3 割ぐらいしか利益が出ない。それでもって人件費から何から引くわけですから。

それと一番びっくりしたのは、皆さんが手に取る本だというので、うちの文学館でもそうなのですけれども、図書館にある本というのは、見てもらうための本だから、結構ぐちゃぐちゃになりますよね。ところが、私達文学館や博物館に置いてある本というのは非常に貴重な本なので、折り目もつけてもらいたくないし、ましてや折ったりしてもらいたくないので、学芸員が横でじっと見ながらやっているのですけれども、それを図書館のようにしてまた売るというのをどういうふうに運営されているのかなと思ったら、カバーをものすごく綺麗に作られているのです。あれはぜひ我々の文学館でも盗みたいと思いました。お金をかけずに職員の皆さんが一つ一つ綺麗にカバーを作っているのです。手作りのカバーですよね。あれにはちょっとびっくりしました。以上です。

**音喜多**　今お話があった通りブックセンターに並んでいる本は商品になりますね。ですからお客様が、その本が欲しいなと思ったら、もちろん購入していくのですけれども、一方では私達は自由に読んでくださいという、そういうスタンスにしていますので、結局その商品を手に取って読むという行為になりますので、できるだけ汚したくないといいますか、綺麗な状態で手元に届いてほしいということがあって、全ての本に透明のフィルムカバーを貼っております。
図書館であれば、装備という形できちんとしたぴったり密着する形でカバーをするのですけれど、私達は包装に使うようなフィルムを、ただ貼ってセロテープで止めるという形をとっています。先ほど、私もブックセンターで声をかけられたのですけれども、大変ですねと言われましたが、もう慣れました。8 年間ずっとやっていますので、綺麗に 1 冊 1 冊すごい勢いでやっているのは、私からするといつものことで、当たり前のことなのですけれども、そういった意味ではずっと続けていますね。

**野田**　冒頭、ファッション協会の方からもご指摘があったように、いわゆる今の流行り言葉で「推し活」ですよね。これ「推しの本」というようなコーナーを作って、だからその展示の仕方や分類の仕方がすごく今風になっていて、例えば東京の代官山で取り入れているようなやり方をとっています。そうすると、一般の書店では流通していないものが、そこに行けばおもしろい本があるよということで来る人たちが、少数だけどいるのだろうと思います。それは東京では成立するかもしれないけれど、八戸は人口がずっと少ないから、ここだけで頑張ってもなかなか厳しいので、次に考えられるのは東北地方全体をカバーしたらどうなのか、その辺のことは議論されているのですかね。将来、もっと広範囲から人が来るようにするとか、そんなところはどうなのでしょうか？

**音喜多**　オープン当初は、文化であったり教育であったり、そういうことを主眼にした施設として考えた部分が大きかったと思うのですけれども、いざオープンすると、市営書店というキャッチフレーズをつけられて、多くのメディアに取り上げられました。

オープン時はそれの効果といいますか、全国からお客さまが来てくれて、結構マイナスなイメ

ージでも報道されていたのですけれども、オープン以降少ししてからはどちらかというとプラスの、八戸ブックセンターは選書がすごいとか、企画がおもしろいとかそういうものも含めて、いろいろな意味で取り上げてくれましたので全国からお客さまが来てくれています。

だから元々はあまりメインには考えていなかった観光のコンテンツとしての役割というのは、方向転換ではないですけれども、そういう考え方ももちろん含めながら、今は運営に繋げています。

**野田**　岩崎さん、鳥取市に「定有堂書店」ってあったじゃないですか。そこはまさにこのブックセンターではないけれど、民間の小さな本屋なのですが、ハイデッガーがあるなど、誰が買うのみたいな本があって、ずいぶん長いことやっていましたね。

**岩崎**　はい、定有堂書店という書店が鳥取市内にありまして、今、現在は廃業しているのですけれども、本当に店主のセレクトによって選ばれた本を愛する人たちが集まる書店でございました。その書店の中で例えば読書会を行ったり、書店を利用される方でフリーペーパーを作ったりということが自主的に行われているような書店でございまして、書店の聖地と言われるような場所でもあったのですけれども、実はその跡地が、スライドの中で紹介した本屋さん「SHEEPSHEEP BOOKS」になっております。

**野田**　定有堂のことは図書館の司書の方々もリスペクトしているような、そんな感じですものね。それでブックセンターも、当初はネガティブな反応だった、経営が成り立つわけないと批判もされたけれど、見方を変えれば、今書店が減っていて本が売れなくなっていく中で、新しい方向がもしかしたらここにあるかもしれないということになったと思うのですね。

それから、ここでもう一つの視点として、本や文学、こういったことをコンテンツでキーワードにしたまちづくりとは、どんな意味や意義があるのだろうかということを教えていただけませんか。例えば「音楽のまちづくり」や「アートのまちづくり」はわりと見かけるのだけれど、「本のまちづくり」は、日本の場合、これまであまり聞いたことがなかったと思うので、それについて何かご意見や情報がおありの方がいらっしゃったら教えてください。まちづくりとの関係でどういう特徴があるか、どういうメリットがあるのでしょうか。

**明石**　これはですね、そもそも論で、本もそうなのですけれど、もう文学というと、すごく敷居が高くなるのですね。「ましてや絵本、文学なんてそれどころじゃないわ」というふうな世代がありますよね。子育てであったりそういう世代であったりすると、やはり文学がすごく高尚なものに見えたり、とっつきにくい部分があったりするのですけれど、私がそういうときによく言うのは、例えば岡山県浅口郡里庄町出身の藤井風というシンガーソングライターがいて、今やもう世界的なシンガーソングライターになりましたけれど、ある日突然、NHK の紅白歌合戦に出て藤井風って岡山県の里庄町の人なんだということに皆が気づくと、一斉に里庄町が聖地巡礼の場所になってしまうのですね。

その藤井風くんが作った歌詞は、我々60 代の世代が読むと全然詩情がわかないのですけれども、若い人たちが読むとわかるというものなのですね。それと映画であるとか、演劇であるとかですね、演劇もいろいろあって、例えば今からもう 30 年以上も前に先ほど私が言った岡山出身の小川洋子さんが書いた『密やかな結晶』という本があるのですけれど、それを東京芸術劇場、360 度

の舞台で一流の女優さんがそこで演じる、あるいは一流の男優さんが演じることによってそれがブレークするわけですね。だから、やっぱりいわゆるサブカルチャーと呼ばれている部分、これはアニメなども全部そうなのですけれども「それって全部文学なのですよ」ということを、我々は言い続けなければいけないと思います。

**野田**　明石さんのおっしゃる通りだと思って、この後ちょっと僕も簡単にプレゼンさせてもらいますが、そこでもそのことに触れます。演劇人や映画の人は、本はまだかっていうじゃないですか。本って脚本なのですよね。でも本があるから、次の作品つまり、演劇や舞台、映画ができるので、例えば『将軍』を今回ディズニーが作って、いろいろな賞を取りました。この場合、まず本がしっかりできていたことが基本にあります。本という第 1 次創作物が優れていることが重要だと思います。それがいい加減だったらあとは全部いい加減になってしまいます。それが魅力的なことが大事だと思います。

次にこういうことができたら絶対面白いという話はありませんか？明日こんなことしたい、来年こんなことができたらいいねという話で、ジャストアイディアでもいいのですけれど、何かありませんか？ブックセンターの音喜多さんからどうぞ。

**音喜多**　何か私が喋ってしまうと、来年度からやれという話になりそうなので、何とも微妙なところがあるのですけれども、実際私達の課題というか、普段感じていることが、やっぱり若い子たち、学生ですね。中高生と大学生の子たちにブックセンターに来てほしい。本を読んでほしいというと、すごく強制的で嫌なのですけれども、そういった方が何か交流が持てるような、そういった取り組みというものがもうちょっとうまくできればという考えはあります。
例えば学生の子たちはいろいろなことで忙しいので、なかなか時間も取れないといいますが、その間を縫ってどうにかできないのかなということが、日々思っているところですね。

**野田**　明石さんはどうですか。

**明石**　先ほど言われたように、言ったらその人がやらなければいけないという面からすると、どこも一緒だと思うのですけれども、そういう場合は、本当に実現ができるかどうかわからないような夢のような話を言うと、私は文学フェスティバルの運営委員会の中で、今後どういうふうにやっていくのかという話でいつも素っ頓狂なことを言うのですけれども、今年は太平洋戦争が終わって 80 年、昭和で数えるとちょうど 100 年になるのですね。それに向かって、未だに世の中が平和にならないことに対して、政治家にしても、それから企業の経営者にしても、いろいろなことをやろうとしているのですが、文学で何かそういう平和に資することができないかと思います。何をやるのだという話なのですけれども、文学で平和な世界を作ろうとか、そういう取り組みを、文学館協議会に加盟している文学館が今、全国に大体 100 館ぐらいあるので、そういうところにも呼びかけて、今の独裁者と呼ばれている指導者や政治家はきっと何らかの本や言葉に影響されて、今の政策が出ているのだと思うので、これからの子供たちに対して平和な世界を作っていくための物語であったり、作品であったり、そういったものを提供していこうではないか、そういうことが何かできないかなと、思っています。

**野田**　岩崎さん同じことなのですけれど、鳥取県立図書館は「居場所」と早くから言い出したと

ころなので、結構先進的な取り組みをしてきていると思うのですが、さらにもっとこうなったらいいねということはありませんか。

**岩崎**　さらにはちょっと。今やっていることとして図書館へ行こうキャンペーンということもやっておりまして、全市町村立図書館、県立図書館、大学図書館、あと専門図書館でスタンプラリーを行っています。皆さん利用される図書館はほぼ固定されていますよね。けれどもこういったスタンプラリーを行うことによって貸し出し１日１回で他の所に回っていけるのですね。スタンプが集まったら賞品が当たりますというのをやって、いろいろな図書館の棚であったり、特徴であったりそういったものを比較できるような機会になっています。

先程の報告でも紹介したのですが、同じように個人書店に関してもなかなかその特徴がわからない、行きづらいというご意見がありましたので、そういったものをミックスして、鳥取県は小さい県ですので、回遊していくような機会を作っていければと思っています。

**野田**　はいありがとうございました。公立の図書館というのはなかなか縛りがあって、自由に考えられないのかもしれないけれど、鳥取の場合、やっぱり人口がどんどん減って、もう 54 万人ですか。僕が居たときもなにか必死にやらなければということで、鳥取県立図書館の場合はすごくいい形でやってきているなと思います。

それではそろそろ時間がまいりましたので、最後のまとめに入りたいのですが、私の方からも少しプレゼンがあるので、その前に、今日、フロアにいらっしゃる、まず岡山市の山下さんから感想をお聞かせください。

**山下**　ご指名ありがとうございます。岡山市の山下と申します。ブックセンターさんを今日拝見させていただきました。岡山市が文学創造都市としてユネスコに申請するにあたって、全国のいろいろな本や文学に取り組まれている町の事業を参考にさせていただきました。八戸さんもこういったブックセンターの取り組みをされていることを把握しながら、私どももいろいろとライターインレジデンスという取り組みや、ジンを販売するイベントなどを行っていまして、今日お話を聞いていると、やっぱりジンの取り組みを八戸さんでもされているし、カンヅメブースということで書く方の支援をされているなど、図らずも同じような取り組みを岡山市でもできていることをとても嬉しく思いながら、何か連携できることはないかとまだ具体的なものは見つかっていないのですけども、考えながら聞いておりました。ありがとうございます。

**野田**　それではもう１人フロアの方からお願いしたいのですが、八戸市図書館の館長の磯嶋さんが今日お見えですので、これまでお話をお聞きになった上でコメントをいただけませんか？

**磯嶋**　八戸市立図書館館長の磯嶋でございます。「本のまち八戸」を立ち上げて8年になりますが、市の中でブックセンターの音喜多さんともしょっちゅうやり取りをします。本のまちとしての連携をして以降、書店とブックセンターそして図書館が連携してと言いながらも、なかなかうまく盛り上げきれていないなと思う部分もありまして、今日、私立の文学館さん、そして鳥取県立図書館と、本当に最先端の取り組みをされているところのお話を具体的に聞くことができたこと、そして、意外にブックセンターのお話を音喜多さんの発表で聞くことがあまりなかったので、それも併せて聞くことができまして、本のまちについて市内だけでなく県外の方たちからのご意見といいますか、外から見た取り組みを直接聞くことができて、そして、それこそ本にフィルムをかけるとか、私達はいつも当然のように行っていることが、外から見るとそうではないのだなということに気づけたことがすごく良かったなと、皆さんのお話を聞かせていただいて思いました。やはりこれからできること、やりたいことをできるようにしていきたいと思いました。

磯嶋 奈都子氏

先ほど岩崎さんから、図書館とブックセンターの事業の棲み分けというお話いただいたのですが、実はうちの図書館は大変歴史がありまして、明治7年に書籍縦覧所というのが設立されて、そこから町立図書館に、そして市立図書館に蔵書も引き継がれてきているという大変歴史のある図書館で、今年150周年を迎えていろいろやっているのですが、実は作家さんを呼んでといったイベントがすごく少なかったのです。

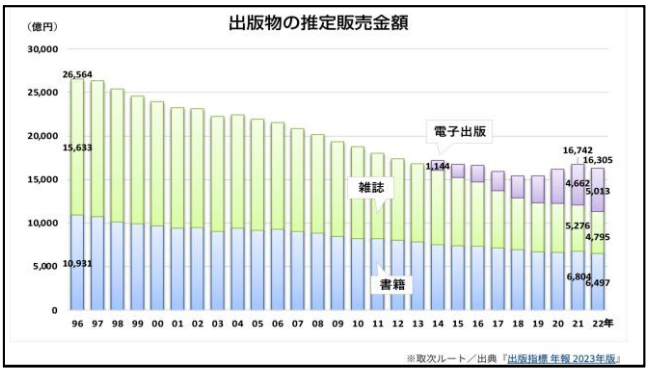
ブックセンターさんが、図書館が当然やっているような事業をされているというお話だったのですが、図書館での講演会などが八戸市の図書館ではとても少なかったので、ブックセンターができたおかげで、そういった作家さんを全国からお呼びになっていろいろな事業をされているというのは、図書館としては棲み分けというより、やってもらえたというところで、私達が手を回せなかったところを補填してやっていただいているということで、とても心強いのです。私達も逆に参加させていただいて、同じように展示しましょうという声をかけていただき、ブックセンターからのイベントの方が多いぐらいで、とてもありがたいですし、八戸市にとってはいい効果が出ているのではないかなと、本のまちということで、効果が出ているのだなと感じております。心強い仲間というような気持ちでおります。

**野田**　では最後にコメンテーターでもあります佐々木先生から、全体のコメントと、さらにまた提言の続きがあれば、お願いしますが、その前に私から、データのグラフがちょっとあるだけですが、最後にメッセージをしたいのでお話させていただきます。

野田 邦弘氏

グーテンベルクの初期の印刷機が発明されて、大量に本ができるようになりました。それまでは、筆写していたわけですから、聖書や日本のお経も筆写です。その頃は文字を読める人が少なかったと思うのですが、科学技術が発達して書店ができて本の流通が大量になっていった。それも峠をこして、先ほどから何度も出てきていますが、本屋さんの数と総坪数、延

べ床面積が減ってきています。
出版する側を見でも、書籍が順調に減っていて雑誌も減っているのですよね。ところが電子出版がそれを補うようになっていて、総額では横ばい状態という感じです。さらにユーザーサイドから見ると、本をどれだけ読むかというと、16 歳以上の 6000 人を対象に文化庁か文科省かわかりませんが 5 年ごとに調査しています。1 ヶ月に 1 冊も本を読まないという人が今、62.6%います。本を読むかわりに何をしているのかと思いますが、大学で僕が教えたときもそんな感じでした。つまり、出版ベースそれから流通ベース読書のユーザーベースで見ても減ってきている。では文字を読んでいないのかと言ったらそんなことはないのです。スマホで見ているのですよね。だから、これまで紙のものを読んでいた人たちが、デジタルで読むようになったということです。要するに媒体の変化、それからもう一つはやはり SNS の方に時間を取られるから読書の時間がそっちに行っていると思います。




一方、図書館について、今日だいぶ話が出ましたけれど、登録者数と貸し出し者の数を見ると、コロナで少し下がりましたけれど、行動制限がありまして図書館にも行かないということがありましたが、それまでは順調に伸びていました。つまり、業界としてはシュリンクして電子の方に置き換えが始まっていて、図書館は結構堅調というふうに、全国のデータから言えるのではないかと思います。本を買わなくなった、買えなくなったということなのかもしれません。買うから借りる、シェアする、そういうふうに変わっているのではないか。これから先は僕の推測ですが、ちょっと目を転じて図書館を見ると、私は横浜市に 1978 年に入ったのですけれど、最初に教育委員会に配属になったのでいろいろな課を見ていたら、図書館くらい関心を持たれない職場はなかったのです。まず予算が増えないし地味なのですね。そんなものかと思っていましたけれど、今は様相が一変しました。

この 10 年ぐらいで、公共図書館にすごくいいものができ、図書館がまちの集客施設に「なってきた。例えばこれは周南市の徳山駅の前にできている図書館ですが、内藤廣さんという大変優れた建築家の方が設計したのですけれど、大和市にできたホールと図書館の合築のシリウスも有名ですよね。100 円入れるとドアが開いて中に入ることができ、自分の机として 2 時間使えるのですが、今は満席です。

富山市立図書館本館は、富山市がガラスのまちづくりをやっているので、ガラス博物館と一緒になった施設です。とてもかっこよく、中もすごく感じがいいと思います。ちょっとデザインに傾き過ぎた発表になりましたけれど、極めつけは最近できました石川県立図書館ですね。

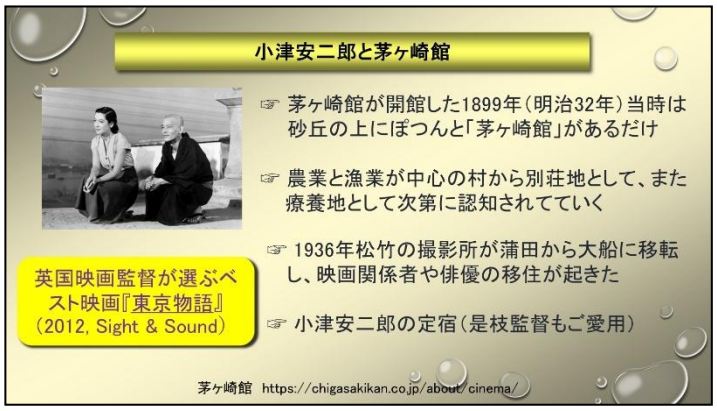
何を言いたいかというと、公共図書館のイメージが変わってきているのですね。つまり、地味な目立たない施設から街の賑わいの中心施設に変わってきた。これはどういうことか、まだきちんと考えが整理できていないのですが、そういう現象が起きている。

もう一方、八戸ブックセンターもそうなのですけれど、ブックマンションといってテーマごとに棚を分けているようなところがあります。ここは正確に言うと、自分の推し活ですね。推し活コーナーを毎月、例えば何千円か払ってワンブロックを借りるわけです。そこに自分の推す本を並べて貸し出しすると、それを借りる人との繋がりができていくことになります。これは吉祥寺

の事例ですけれども、全国にできています。

ということで、結論はないのですけれど、背景として文字を巡る環境が変わっていく中で、流通構造が変わり、消費者の行動も変わってきているということだと思っています。

茅ヶ崎市で仕事にかかっているので少し報告をします。茅ヶ崎もユネスコ創造都市を目指して取り組み始めました。文学創造都市でいこうと、今議論をしているのですけれど、ダイレクトに文学者がいるという話ではなく、例えば小津安二郎がずっと逗留して、原作を描いて脚本を書いていた茅ヶ崎館という旅館があります。ここは、森さんという比較的若い、50 代の方がやっているのですけれど、一緒になってユネスコ創造都市を文学で目指そうという話を今始めているところです。小津の作品である『東京物語』は、イギリスで 2012 年に映画評論家が投票して決めた 20 世紀のベスト映画の No.1 になったのですね。だから小津安二郎は黒澤明と並んで世界に名前が出ていっている人です。その作品をここ茅ヶ崎館で書いていたということと、それからそれにオマージュを受けて是枝監督も愛用し、毎年、ここで脚本を書いています。




昔大船に撮影所があった時代があって、そんなことから映画人が集まってくるという現象が起こっています。映画祭もやっています。それから開高健がかつて住んでいて、記念館があります。こういうことをネタにしながら、ユネスコに手を上げていこうかということを市役所と今詰めています。もう一つの施設の事例ですけれど、南湖院という結核のサナトリウムがありまして、市に寄贈されて登録文化財になったのですが、ここでライターズインレジデンスをやったらいいのではないかという話をしています。

私としても本や文学の分野でどういうふうにまちづくりをやるべきかということに明快なストーリーを持っているわけではないのですが、おそらく岡山の次にどこかが出てきて、文学都市が増えていく中で茅ヶ崎も一緒に連携できたらいいかなと思って発表しました。文学都市を日本でも定着させていくために何か貢献できたらいいと思います。最後に佐々木先生からお願いします。

**佐々木**　大変中身の濃い議論でしたので、最後に少しまとめるという意味で、改めて今日のシンポジウムから私が皆さん方に「本のまち八戸」の更なる発展に向けて、お伝えしたいメッセージです。

第 1 は子供から大人まで幅広い市民が本に親しむとともに、創造的なまちづくりを進めるということを市全体で考えていただきたい。

第 2 が、今日はあまり議論が深まらなかった点なのですが、地域の文学伝統というものを、継承するとともに深める、そしてできるなら若手作家や次世代の文学の担い手を養成するということも考えたらどうか。そして、文学出版関連の創造産業というものをその中で発展させる。

それから第 3 が、今日、全国の本のまちの事例を紹介したのですけれど、やはり児童文学というものを発展させて、子育て環境を豊かにして持続的で健康な社会に向けて貢献すると、それから、今日の討論に出たのですが、文学と他のジャンルの芸術との連携をしていって、やはり文学だけにずっとこだわるというのではなくて、あるいは本というそこからジャンルを広げていくと

いう努力がやっぱり必要で、そういう中で、将来的なユネスコの「世界の本の首都」あるいはユネスコの「文学創造都市」への認定を目指すという運動、ムーブメント、これをぜひ進めていただきたいというのが、私のメッセージでございます。どうもありがとうございました。

**野田**　佐々木先生からの宿題が出ています。その宿題を忘れないようにしてやっていきたいと思いますが、フロアの方からもご質問、ご意見を受けたいと思います。どなたか、もしいらっしゃったら、どうぞ。

**質問**　岩崎さんに 1 点質問したいと思います。鳥取方式ということで地元書店から 92%購入されているということをお聞きしました。鳥取県においては例えば県立図書館ではなく市立図書館やまた学校の図書館の本についても、やはり鳥取方式ということで高い比率で購入されているのでしょうか？

**岩崎**　92%は鳥取県立図書館の数値であります。各自治体によっては、地元書店以外からも買っているところがございますし、地元書店のみから買っているところもあるというまちまちな状態になっております。

**質問**　ありがとうございます。東京の大手会社などもあると思うのですが、そちらから例えばプッシュだったり、そういうこともあったりすると思うのですが、その辺はお断りしてという形でやっているのですか。

**岩崎**　実はあまりプッシュというものがなくて、30 年ほどやっておりますので、こういったものだと認識していただけているのではないかと思います。税金の使い方としていかがなものかというか、効率というか、経済性のようなものを考えたときにどうかという話もあろうかとは思うのですけれど、鳥取県ではそういったことでやっているということで議会の方でも取り上げられたことがあったりします。知事もそういったことで認識されているといいますか、いいことだというふうに言ってもらっているので、そこは今後も続けていきたいと思っております。

**質問**　ありがとうございます。現状、八戸ではそのような形になっていなくてぜひ地元からも買ってほしいという思いもありながら、今、質問したのですけれども、またいろいろなアドバイスをお聞かせいただければと思います。

**野田**　なかなか理想と現実は違いますからね。建築事業では、地元の建設会社に建ててもらいたいところだけどノウハウがないとか、人手が足らないとかということもありますものね。ぜひそこは前向きに進めていただければと思います。他にございますか。どうぞ。

**質問**　ボランティアガイドの代表者をやっております。吉備路文学館の館長さんにお聞きしたいのですが、立ち上げの時点で金融機関が全面的に協力して、現在は入館料を設けていらっしゃるようですが、その応援体制はどうなのかということをお聞きしたいとともに、実はこの場所でたまたま井伏鱒二先生の師弟関係の中で、60 年ほど前に芥川賞を受賞したのが当地の誇りである三浦哲郎さんなのですね。資料を見て吉備路文学館との関係を深く感じました。実は三浦さんが生

まれたのはすぐ隣の呉服屋さんなのですよ。今はもうありません。その三浦さんのコーナーもブックセンターに設けてありますが、市民の気持ちからすると、ゆくゆくは三浦さんの文学記念館、資料館ぐらいは作りたいと思っている方々もたくさんいるのです。そこまでは実現できていないのですが、ブックセンターが全国に先駆けて先進例になるようなこともいくつか取り組んでおりますので、それは誇りとしていきたいと思います。その応援体制のスポンサーの部分はどういう形なのか、そこを教えてください。

**明石**　私どもは 39 年前に文学館として開館したのですけれど、そもそもは創立 95 年になる中国銀行が、創立 50 周年のときに当時の頭取が、倉敷に大原美術館というのがございますけれども、実はここも中国銀行の初代頭取が作った美術館です。文学館を作ったのは守分家というところなのですけれども、当時の頭取がそういう地域に残る財産だから、文学者が残した例えば原稿類であるとかそういったものは立派な財産ではないかと、金利はつかないけれども、財産ではないかということで、非常に大切にされていて、絵画や彫刻は倉敷に大原があるけれども、先ほどの井伏鱒二であったり、夏目漱石であったり、後ほどこちらのパンフレットをみていただきたいのですが、大体 150 人ぐらいが出ていると思います。そういった方々の遺稿類を何とか、外に流出しないように博物館として保管しておく必要があるのではないかということで、県や市は博物館を持っていたり美術館を持っていたりするのですが、当時はとても良い時代というか、預金金利が 6%ぐらいですから、言ってみれば私も銀行員をしていましたけれども当時は定期預金さえ集めれば給料もボーナスももらえていた時代だったと思います。そういうときに文学館を作りました。

時代が経って、今やマイナス金利の時代です。ここで日銀が金利をどうもあげるみたいですけれども、ついこの間までマイナス金利だったので、できるだけ節約せいというふうに私たちも言われたのですけれども、考えてみると、美術館の絵画やそういったものは結構保管にお金がかかるのですね。油彩の絵の具であったり、水彩絵の具であったり。それからしたら、まだ本ですから保管にお金がかかることもないので結構切り詰めながら、ここ 10 年近くやってきたのですけれども、40 年経つといろいろなところにガタがきて補修をしていかなければならないのですが、何とか補修ができそうです。そろそろ銀行が 100 周年を迎えるのですが、文学館として引き続き残していきたいと思っております。

今、全国文学館協議会に入っている文学館は 100 館です。協議会には入っていないけれども、何とか記念館と言って運営されている文学館もあります。そういったものを入れると 250 館ぐらいになります。そういったところが、さっきおっしゃられたように地域の誇りとして、次の時代に継承していくものとして残していただければありがたいと思います。もしも八戸市で何かやるということがあれば、全面的に協力をさせていただきたいと思います。よろしくお願いします。

**野田**　それでは時間も過ぎておりますので、このシンポジウムはこれで閉じたいと思います。皆さんどうもありがとうございました。

“生活文化創造都市推進事業”

# 生活文化創造都市フォーラム「八戸地域会議」実施報告書

２０２５年３月発行

編集・発行　一般財団法人 日本ファッション協会
〒101-0051　東京都千代田区神田神保町１－５－１
神保町須賀ビル７階
TEL　03-3295-1311　FAX　03-3295-3295